

## 2023 年度 自己評価・学校関係者評価

認定こども園 西那須野幼稚園

本園では、教職員に対してチェック方式による自己評価を実施しております。  
認定こども園への移行に伴い、2019 年度より評価の結果を公表します。

・評価は3段階評価 [ 達成されている、概ね達成されている、未実施・取り組みが不十分 ]

評価項目	自己評価	取り組み内容
教育理念や方針の理解 環境構成 教育課程の編成 評価と反省	概ね達成	保育日誌 カリキュラム等の見直し 「認定こども園等における人権擁護のためのチェックリスト」実施 [保育者による虐待及び不適切対応防止]
健康と安全への配慮 幼児のみとりと理解 指導とかかわり 保育者同士の協力・連携	達成	視診、体調確認 感染症対策 避難訓練 年齢や発達に沿った見守り 混合保育 園バス安全装置の設置 [置き去り防止]
教師としての能力や適性 良識とマナー 保育の楽しみ・喜び 感性・周りへのアンテナ	達成	挨拶や感謝の言葉 報告・連絡・相談 意見交換 学期末反省会
保護者支援 情報の発信と受信 守秘義務の遵守 クレームへの対応	達成	園からのおたより 重要事項の説明 守秘義務の遵守 保護者相談
地域の自然 地域とのかかわり 小学校との連携	概ね達成	子育て支援、園庭解放 リ・ユニオンデイ 小学校訪問 山林自然観察園
研修・研究への意欲や態度 専門性に関する研修・研究 遊具や教材に関する研修・研究 園の環境に関する研修・研究 自らを高めるための学習	達成	園内研修・園外研修 職員研修旅行 〔 ・ 観劇 (赤坂) ・ 海外視察 (韓国) 〕 専門機関との連携



マスクを外しての生活になり、子ども達と表情を見合って過ごすことができ、そのような当たり前だったことが嬉しい日々を送ることができました。それでも時期によってはインフルエンザ等の感染症が近隣で広がっていたので、状況に合わせて消毒やマスクの使用などを呼び掛け、大きな流行を防ぐことができました。毎日、園全体の欠席状況を確認し、対策を行った結果かと思えます。

コロナ禍で見直しをしてきた行事は、更に見直しをしながら進めました。作品作りの進め方や発表会の持ち方等、子ども達の遊びを大切にし、進めていくためにはどのようにすれば良いか、環境づくりは今後も検討課題です。自由遊びや混合保育の環境設定についても取り組みを反省し、更に検討していきたいと考えています。前年度から見直しをしているカリキュラムについても、次年度に続けて行っていく予定です。

運動面では、コロナ禍での経験不足の心配が続いていたので、各保育者が工夫してやってみて良かった取り組み等を出し合い、意見交換しながら進めました。その結果が年度末の反省会で報告され、運動調べが昨年度を上回る出来率だったことがわかりました。また、数字上の結果だけをみるのではなく「やってみたい」という環境づくりを大切にしました。十分に出来ていなくても挑戦したことが評価される、ということで挑戦する子が多く、その結果、なわとびを跳べる子が増えたという報告もありました。やってみたい・やってみよう、と思える環境づくりをいろいろな面でも広げていきたいと思えます。

他にも、反省会では現場の先生たちから月間絵本の良さがあげられました。友達と共感したり、思いを絵に描いたり、文字にも関心を示したり…絵本を通して、子ども達と親しんでいます。園でも家庭でも、このような良い時間を持てるようになっていくことを願って期待しています。

園児と職員の関わりとして、人権擁護のためのチェックリストを年2回実施し、各自が子ども達との関わり方を振り返って確認・反省する機会を設けました。「子どもに寄り添って言葉かけや対応をしているつもりだったが、何気ないと思っていた一言が人権に配慮されていないことに気づくことができ良かった」等の意見がありました。2学期から、スマホで利用できる『コードモン』アプリを導入し、登降園管理システムによる出欠確認を保護者の方と共有しました。アプリで確認できない場合は、担任が電話等で園児の安全面や様子を把握するように努めました。今までの電話連絡に比べて時間的にスムーズになりましたが、互いの様子がみえるようなやり取りが少なくなってしまっていることを感じています。その分、家庭・保護者との連携としては、スポーツデイや造形展等を含めた保護者が来園する機会や保育参観日・個人面談等、対面での時間を大切にしていきたいと思えます。

職員全体での研修の機会として、8月には観劇、11月には市川奈緒子先生(渋谷区子ども発達支援センター)に来園していただき、保護者支援についての学びがあり、職員としての思い・方向を共有していく時間となりました。

保護者支援につきましては、市の子育て相談課、児童相談所とも連携をして連絡を取り合う事も有りました。今後も家庭に寄り添った支援が出来るように心がけていきたいと思えます。その為には、専門機関との関わり、職員同士も連携し合える関係を続け、大切にしていきたいと思えます。



新型コロナウイルス感染拡大から4年過ぎるなか、以前からのインクルーシブ教育に加え、スタッフ一同が原点に立ち返って再構築してきた保育実践が実を結びつつあると考える。昨年(2023年)の秋には、保育者向けの月刊専門誌「Pri Pri(世界文化社)」のインクルーシブ教育実践について取材があり、7月に発行が予定されている。また、今年(2024年)発行予定の「保育者・教育者になる人のための特別支援機養育(萌文書林)」に寄稿する機会も与えられた。これらは、建学の精神「自分を愛するように他の人をも愛しなさい(聖書)」が、教育の場において、脈々と受け継がれてきたことが、専門家諸氏からも評価された結果と考える。

対外的には、西那須野教会牧師・学園評議員の潘炯旭先生のご尽力で、希望するスタッフと役員計19名が韓国ヘイソン幼稚園での学びの機会を得ることが出来た。専門通訳として前橋国際大学の張信愛先生が奉仕して下さり、充実した学びとなった。今年度は、ヘイソン幼稚園から訪問がある予定である。

韓国は小学校が15人学級、ソウル市内は学用品の無償化が実施されている。また、保育学会では、ヌリ課程という乳幼児期の教育課程も注目されていることもあり、今後も交流を深めたい。また、欧米で主流になりつつあるレジジョエミリア・アプローチの教育研修に1名が参加した。

ところで、子ども達が社会で活躍しているであろう2045年はAIが人間を超えると言われている。コロナ禍で前倒しになったVUCAの時代に私たちも直面している。今後、AIが加速度的に発達することは、人類にとって必ずしも良いことだけでは無く、失業などの負の側面も併せ持つと考える。子ども達は、我々以上にその時々々の適解を探求して生き、折れない心(レジリエンス)、自己統制力(意思・感情・行動)、価値観の違う人と一緒にやり遂げる力等に代表される非認知能力(≠IQ以外)が求められる。その非認知能力の基礎が幼児期の遊びや他者との協働による課題解決を通して育まれると言われている。そして、非認知能力は、認知能力とも相まって成長していくことが報告されている。本園は数年間かけて遊び中心とした保育に移行してきたが、コロナ禍の行事再編により、進捗と質的充実が図られつつある。

このコロナ禍や戦争による影響と思われるが、担任教師の自己評価に、2023年度も落ち着きのない子ども、運動能力低下という記載が見られた。東日本大震災の年に岩手県・宮城県・福島県の重篤な被災地に生まれた子どもは落ち着きのない子どもが多く、その追跡調査では、語彙数が少ない子どもの増加、後天的知的発達遅滞の比率が増え、その原因の一つが不安の中の子育てと報告されている。今回、教師達は、このコロナ禍の子ども達も同じような道を歩まないために、絵本の読み聞かせや家庭との連携に努めてきた。そして、自発的な園庭遊具遊び・縄跳び等を通じた運動能力の向上にも努めている。また、引き続き外国をルーツとする子どもたちも増えて、多様性を大切にしたい保育の課題についても追究していきたい。

「保護者への対応」については、副園長及びクラス担任がかなり努力した。また、2023年度からアドバイザーとして今野歩先生にも来ていただいている。特に、コロナ禍、ウクライナ戦争による不安の中で、様々な意味での支援を必要とするご家庭が増えただけでなく、内容においても他の機関との連携を要することが多かった。経験豊かな宮城教育大学教授長谷川茂先生には、就園前から卒園後のアフターフォローもしていただいていることも感謝したい。

最後に、保護者の皆様のご理解・ご協力のもと、ICT化が軌道に乗りつつある。今年度は、保育の見える化、仕事の効率化について更に進めたい。



2023年5月に、新型コロナが5類感染症に移行し、幼稚園ではこれまで自粛・短縮していた行事の再開が多かった。しかし、夏前に来た時は、子どもたちの自由でのびのびとした姿はまだ十分でないように思えた。それでも保育環境として、アクリル板などの隔たりがなくなったことは大きいようだ。

秋頃、あるクラスを訪問し、給食も一緒にいただいた。子どもたちに迎えられて保育室に入ると、みんな私のことをよく覚えていて、たくさん話をしてくれた。先生もよく子どもたちに話しかけている様子だった。園全体を見ても、子どもたちの表情が生き生きと見えたので安心した。おしゃべりの声もたくさん聞こえてきた。

コロナ禍に限らず、家庭支援の大切さは痛感するところである。親の別居や離婚など、家庭状況の変化に早く気づくことができるのが幼稚園。そして、この園が行う家庭支援は、必ずしも解決だけではない。問題に対してじっくりと時間をかけて信頼関係を築き、卒園後も関係を断つことなくそっと見守り続けていく。そんな支援ができる園である。寄り添い、励まし合い、支え合う、自分を見守ってくれる人がいることを思い出す、そのことによって辛い日々を何とか過ごせる人もきっといるだろう。

ここ数年は、職員の確保も重要な課題となっている。ある先生と面談したとき、「何人も受け持って大変だね」と聞くと、「その子の成長を見ていると楽しい」「できることを更に伸ばすのが自分の課題です」「こどもっておもしろい」と話してくれた。できないことをどうにかしてやろうではなく、その子の良さを応援する姿勢は素晴らしい。また、『こどもっておもしろい』の言葉が出たことはとても興味深い。この先生は、家に帰ると、その日感じたことなどを母親に話すという。そんな風に保育者を受け止めてくれる家族の存在もまたありがたい。

ワーズワースの詩『虹』の中に、「こどもは大人の父」という一節がある。子どもの頃に感じた喜び、愛情、感動、畏怖…。園で子どもたちと一緒に過ごす先生は、その姿から多くのことを教えられていることだろう。かつて自分がこどもだった頃、実はちゃんと愛する人を思いやり、一生懸命に考え、力いっぱいに行動していたのではなかったろうか。子どもの頃にそうだった心、大人になっても持ち続ける意味が確かにあり、それは老いてもなお自分の拠り所となる。

最近の流れとして、集団保育の中での療育の有効性がよく取り上げられている。この園では制度が作られるかなり前から実施してきたことだ。このような取り組みを外にアピールし、実際の子どもの成長の様子を伝えていくことが大切である。様々な専門職が集まっているような視点から子どもの姿を捉える、待つだけではなく外へ積極的に働きかける、その時々状況に合わせて学ぶ・変わる、これらの仕組みがうまく回ることで、地域の財産になるような場所になることを願う。

